

11日、初飛行に成功したMRJ（三菱リージョナルジェット）には富山県内メーカーの技術が生かされた。主翼部品を生産したのは精密機械部品製造の石金精機（富山市）である。清水克洋社長（37）は「ものづくり富山発展の大きな可能性が広がった。生産に携わった全社員が誇りだ」と感慨を込めた。

【1面に本記】



富山の技術乗せ離陸

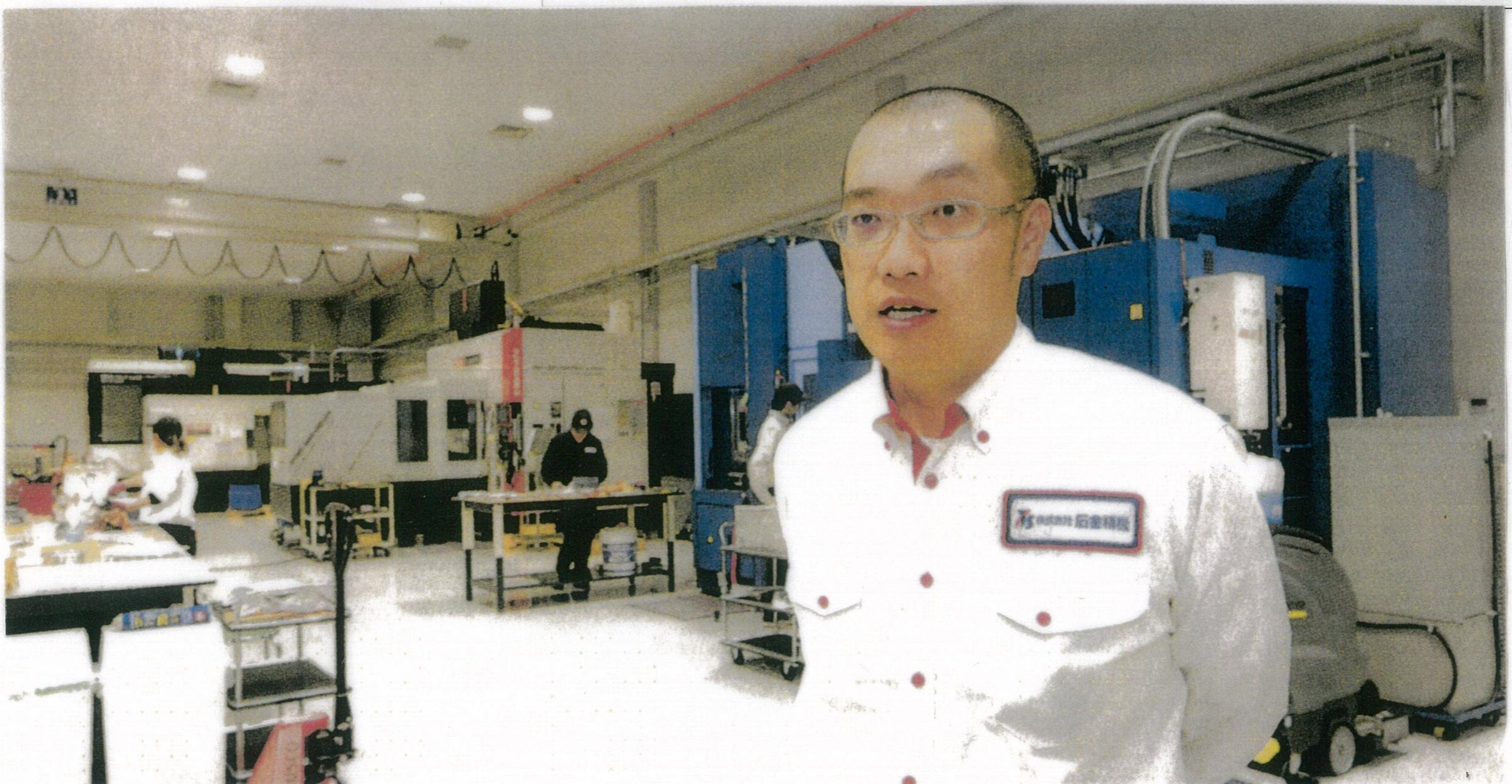


石金精機は、MRJの揚力を増大させる「高揚力装置」を動かす「レール」を手掛けた。同社によると、高揚力装置は離着陸時など必要に応じて主翼から作動するため、通常の部品に比べて動きが激しい。レールの摩耗も激しくなり、航空機で通常使われる軽量なアルミニウムではなく、鉄を使用した。

鉄を航空機部品に使う場合、熱処理の高度な技術が必要となり、「工作機械分野で長年培ったノウハウが生きた」（清水社長）。2013年春からMRJでの採用を見据えて試作に着手。試行錯誤を重ねて可動性に優れたレールを完成させ、他社との激しい受注競争を勝ち抜いた。レールのほか機体用も合わせて約40種類の部品を納入した。

同社は従業員約70人。今年2月、富山市流杉の本社隣接地で航空機部品専用工場を開設した。MRJ試作機に続き、量産機についても三菱航空機と受注契約を結んでおり、12月から生産に入る。米ボーイング向けの部品と合わせ、3年以内に航空機分野の売上高を現在の約6倍に当たる2億4千万円に引き上げる計画である。

同研究会長を務める清水社長は、「MRJは主に地方都市間を結ぶ航空路線に利用されると聞いており、地域振興の面からも責任が大きい。初飛行を契機に航空機分野で受注が増えれば、県内製造業の新たな強みになる」と期待を高めた。



石金精機の航空機部品専用工場で
MRJの初飛行を喜ぶ清水社長

石金精機 主翼部品を製造

MRJ初飛行